

多民族いる異世界に3兄弟の特殊作戦群が来た

素人小説書き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エルフ、ダークエルフ、ドワーフ、ヒューマン、キャット、ドラゴン、ドッグ、ムース、オーガ、ゴブリン、サキュバス、フィッシュ、ゴッド

混沌とした異世界に三兄弟の特殊作戦群が知らず転移をする。

あなたたちはあの世界に戻れない…この異世界で身を消すがよい

我らが手伝おう…

目次

第一話 知らぬ土地に足を踏めばもう帰れない | 1

第二話 I a m j u s t i c e !! 25

第三話 捕虜を解放し侵略者を皆殺しにした緑の戦士達 | 41

第一話 知らぬ土地に足を踏めばもう帰れない

2030年4月12日

日本国内

どこかの山奥

「ふう……これで、全部だ」ドスンッ……

暗い山の奥で武器と弾薬を自衛隊の装甲車に入れていた

「よくやった同志よ、これで我々も攻撃が出来る」

服装がロシアの軍服を着ている男が運んでいた男と話す

「ああ、これで俺たち新日本赤軍が蜂起するのも時間の問題だな……にしても、どこから陸自の装甲車と自走砲を盗んだんだ？」

装甲車の隣に203mmの自走砲がでかど置いてあった

「ああ、自衛官内部で我々を支援する者からもらったのだ元々廃棄予定の物を我々に譲り受けた」

「デカイコネだな」

「同じ思想は意外にも敵の中にもいると言う事だ……さあ、おしゃべりは終わりだ警備に

戻っておけ」

「分かった…」カチャ…

男の指示に従って89式を持ってそのまま弾薬を運んだ男は離れようとする

「…(ガサツ!!)!!」カチャ!!

「どうした?」

突然後ろから音が聞こえ将校姿の男と運んだ男は慌てて振り向く

「…何だ?」

辺りを見ている誰もおらずただ風が吹いただけか…と思っていると…

パシユ…

「ガツ…」ドサツ…

「!?どうs (パシユ…) うぐツ!?!…」バタンツ…

運んだ男は顔面に銃弾を受け将校の男は心臓に当たり絶命する

…

…

周りに静けさだけが残ると…

龍「…敵二名排除…確認するぞ付いて来い」スツ…

仁「はいはい行くぞー剣」カチャ…

剣「アイサー」カコツ、パチンツ!

近くの茂みに隠れていた3人が銃を構えながら出てくる

龍「…」スツ…

倒した敵と持っていた写真一緒に見て確認する

龍「…こちらH Q応答願いますどうぞ」カチツ…

H Q「確認、どうぞ」

龍「ターゲットの殺害を確認したこれより反政府ゲリラの所有していた装備を回収する」

H Q「了解、速やかに回収し撤収せよ回収班は地点2—5—3に待機している以上通信終わり」ブツ…

龍「了、通信終わり…仁お前は装甲車に乗って先行を、剣お前は一緒に自走砲に乗れ」ポイツ

目標を殺害し本部に連絡した龍は撤収の指示を出して敵から取った鍵を仁に渡す

仁「おう!後ろは任せませ!龍兄さん!」バムツ!!

龍「任せとけ」スチャ…

鍵を受け取った仁と剣は龍に後ろを任せて車と自走砲にエンジンをかける

キュルルル!!…ブウォン!!

仁「じゃあお先！」ガコツ!!

ブーーン!!

エンジンが先にかかった仁は先に大きな音を立てて走って行く

「?今のn(パシユ…)ガツ!」ドサツ:

「!!敵だー!!敵が来t(パシユ…)ギヤ!」バタツ:

仁のエンジンに気付いた敵が急いで龍達に向かつて来る

「自衛隊だ!!殺せ!!」バババババツ!!

「政府の犬め!!ここでs(パシユ…)ギヤ!」バタンツ:

龍の的確な射撃で敵が中々顔を出さないがやはり敵の拠点だからか数が多くまだま

だ集まってくる

龍「…:剣もう動かせ、かなりの数の敵が来たぞ」パシユ…:パシユ…:

剣「ちよつと待ってくれ…:ああもう!!これオンボロで動かねえ!!」カチツ…:カチツ…:

ブルルルン…:ブルルルン…:

運転席に座っている剣がエンジンを動かそうとしても少しうねるだけでかからず何

度か試行錯誤しているが…:

龍「チツ…:少し待て(ピンツ!!) 催涙投擲」ポイツ!!

ボシユ——…:

「ゲホツゴホツ!!目、目が!!」

「う、うげえ…ぎ、ぎぼぢわるい…」

広範囲に投げた催涙ガスをまともに食らった敵は咳き込んだりゲロを吐いて動きが止まった瞬間龍は急いで自走砲のエンジン向かう

龍「…」スツ…

そして、かからないエンジンにこうする

龍「動けやポンコツがあ!!」ガアン!!!

筋肉式解決方法

☆な☆ぐ☆る☆

ブルルルンツ!!

剣「!やった!エンジンが点いた!!」

まさかの方法でエンジンがかかってしまう

龍「この手に限る」

※なおこの手しか龍は知りません

剣「兄者!!乗ってくれ!」

龍「了解」ノシツ

「ゲホツ!!ま、待て!!あいつらを逃がすな!!(パシユ…)グツ!?!…」バタツ…

敵を足止めしながらも自走砲の後部座席に飛び乗る

龍「乗ったぞ！出せ!!」パシユ…パシユ…

剣「おう！捕まってくれよ！」ダン!!

ガガガガガッ!!!

龍「ウグツ!?!」

剣「イヤツホオオ!!!」

龍が乗ったのを確認した瞬間剣はアクセルペダルをベタ踏みして急発進して敵の基地から離れていく…

山の奥深く

仁「龍兄さんと剣おせえな…」カチツ…ボツ!

敵基地からかなり離れた所で車から降りて龍達を待っている仁は煙草を吸いながらあたりを見回す

仁「スウー…ハア…ん?…ん?あれ?今日の天気は晴れじゃねえのか?」

煙草を吹かしていると段々少しづつ周りに霧がかかってくる

仁「チツ：これじゃあ、回収班の所まで行くのに迷っちゃまうよ：はあ：ん？お、見え
た」

クドクドと独り言垂れていると遠くからでも目立つ自走砲が見えて来た

仁「おーい！ここだよー!!」ブンブン!!

剣「あ、兄者！仁兄さんが見えましたよ！」

龍「こつちも見えた：よし、仁の前で止まれ」

剣「了解しました！」ガゴツ！

龍の指示に従ってアクセルを踏む

ゴゴゴゴゴツ!!!

仁「：なんかスピード上がってね？」

龍「：ブレーキかけろ」

剣「ほい！」ダン!!

キイ———!!!ズン：

仁「俺を殺すつもりか？龍兄さん？」

龍「坂を上がるには少しアクセルが必要だったんだ勘弁しとけ：とりあえず、これで

合流できたから後は回収班の元に行くぞ先頭は俺達が行く」

仁「へいへい、じゃあ素直にケツに付いて行くよ…案内は頼んだぜ」バムッ!!

龍「わかったよ…にしても、霜が段々濃くなってきたな…回収班のいる所まで迷わないように行かないと…とりあえず、前進だ剣進めろ」

剣「ほ…い、何か見えたら止めてよ」ググッ…

キュラキュラ…ブーン…

先ほどと変わって今度は龍達の自走砲が先頭で仁の装甲車が後ろに付いて行く

龍「…(おかしい…作戦前は雲も湿気も無い状況だったはず…なのに、段々と周りが深くなってきた…チツ…GPSもさつきからおかしい…ノイズしか出てきてない…それ…)」

ゆっくりと進めて周りを見ても近くの木が見えないほど霧が深くなり後ろにいる仁の装甲車のライトがギリギリ見える程

そして、龍の持っている電子機器も仕様が出来ないほどエラーとノイズが出てきていた

更に、日本ではあり得ない匂いも段々と感じ取ってくる…その匂いは…

龍「焦げ臭い匂いと死臭の匂いがする…」

剣「そうですか?クンクン…あ、僕花粉症だから鼻が利かないんだった」

龍「そう言えばそうだったな…二人とも停止しろ」カチツ

剣「了解」ギイ!

仁「了」キュツ:

無線で二人に止まるように指示した龍は自走砲から降りる

剣「兄者? どうしたんですか?」

龍「その場で待つてろ: 少し先を見てくる」カチャ:

20式小銃を構えながらも先を見に行く

仁「おいおい! 一人じゃあ、あぶねえよ! 剣! 行くぞ!」ガチャン!! ガコンツ!!

バレットM82A1のマガジンに入っている12.7mmを装填しながら龍に付いて行きながら剣を呼ぶ

剣「わかつてるよ! ほっ!」パチン! カチャ!

折り畳み式の89式を持って慌てながらも仁の後ろに付いて行く:

龍「: チツ、隊長の指示には従えと前にも言ったはずだぞ」

仁「そうカツカすんなって! 俺達兄弟だろ? 死ぬ時も一緒さ!」

剣「そうそう! 兄者だけ死んだら母さんと父さんに迷惑かかっちゃうからね!」

嫌そうな顔をしてもニッコリと返す弟二人に呆れながらも元の場所に行けと言わずそのまま一緒に進む

龍「: 好きにしろ: とりあえず進んで霧を抜けるぞ、いいな?」

仁「Y s e s i r」
劍「了解！」

森林

「ハア…ハア…ハア…（に、逃げなきや!!人間から逃げなきや!!）」ザッ！ザッ！ザッ！

「おい！あそこに子供がいるぞ！」

「逃がすな！追え！」

暗い夜の中、男達に追われているボロボロの少女が呼吸を荒げながらも急いで木々の間を縫いながら必死に逃げていた

「いやだ!!奴隷になりたくない!!」ザッ！ザッ！ザッ！

「あいつを逃がしたら報酬が少なくなるんだ！急いで捕まえねえか!!」

「クソツ…ちよろちよろ動きまわんじやねえ!!」

しかし、小さい体では大人から逃げられず段々と距離が縮まっていくが、運が悪い事に…

ガッ!!

「キヤツ!!」ドサツ!!

木の根っこが少女の足に引つかかって大きく転ぶ

「うう…」

膝が少し切れて血が出て痛い相手がそんな事気にせず少女に近づく

「さあ、お嬢ちゃんおじさんと一緒にみんなの所に行こうか♪」

「ヒツ!?!い、いやあ…だ、誰か助けて…」ズリズリ…

転んで足に力が入らない、少女は小さな声で助けを呼ぶが誰も助けに來ない…

「ハハ!助けてだつて?こんな真夜中の森で妖精さんが助けに來るㄥ(パシユ…)…あ、

ああ?」ドサツ…

「? おい、どうs(パシユ…)ガツ!」バタツ…

「!?!お、おい!!何が起きて(パシユ…)…」バタン…

「…え?な、なにが…」

突然男三人が血を流しながら倒れて何が起きたのかさっぱり分からない少女は困惑している…

龍「おい、大丈夫か」

「え?…ヒイ!?!」

突然、後ろから声がして誰かと振り向くと大柄な男が目の前にいて驚いてこう言つて

しまう

「オ、オーガ……」

龍「俺はオーガでもないぞ小娘……それより、その怪我を見せなさい軽く消毒してあげよう」スツ……ガサゴソ……

「え……あ、ありがとう……」

怖そうな顔をしている人間は少女の足に持っていた水筒を開けて軽く水をかけ少し消毒液を掛けて包帯を巻く

「……おじさん優しいんだね」

龍「おじ……ん、ンンツ!!まだ、27歳だからおじさんではない……それより（おーい！）来たか……」

「?」

仁「一応適当に周り見てきたけど、特に何もな……おいおいおい！何殺してんだよ!?!?こんなことやったらH.Q.にぶつ殺されちまうぞ!?!」

暗闇からギリースーツとペイントを塗っている大きな筒を持った男が出てきて来た

龍「じゃあ、助けてと叫んでいる少女に明らか誘拐か何か目的を持っている男たちが居たらお前ならどうする?」

仁「男殺すわ」

龍の質問に即答で仁は答える

龍「だろ…んで、君は一体どこから…おい、仁俺は今幻覚見えてんのか?」

仁「ん? どうしたの?」

暗い森林で月の一筋の光が少女に当たった瞬間目にも疑う光景が見えた…

龍「耳が…長い!」

仁「んな、あほな事…ほんとだ!」

「?」何を驚いているの?」

龍「着け耳じゃないよな?」

「うん…ちゃんとした耳だよ」スツ…

少女が不思議そうに思いながらも髪を避けて耳元を見せる…

そう人間から逃げて来た彼女は美しき種族

エルフの種族だ

仁「マジかよ!?! エルフってのは、架空の存在じゃねえのか!?! てかめつちや可愛い!!!」

「…」

龍「おい、本音漏れてるぞ」

仁「おっと、失礼…で、何で日本にエルフがいるんだ?」

「に、日本? ここは、フィルデシアっていう国だよ?」

龍「……」

仁「ああ？何言ってるんだ？ここは日本に決まって……そう言えば、死んでる奴ら中世時代の革のベストを着てんな……じゃあ、俺達がいるのは……日本じゃない？」

龍「バカ言え、外国に行くには海を越えなきゃいかんのだぞ？なら、ここは日本で（こちら剣、応答せよ）こちら龍どうした送れ」カチツ……

仁の言っている事が馬鹿げていると言おうとした瞬間別の方向に索敵させていた剣から無線が入る

村の近くにある草木

剣「今、村を見つければ近づこうとしたけど……何かおかしいと感じて近くの草木に隠れて監視してたのだけど……」

近くの草原で伏せながら双眼鏡を覗き片手で無線を開きながら龍に話す

龍「何か、気づいたか？」

剣「……村にいる……えつと……え、エルフの男女が大きな倉庫で半々に送られているんです……それも、装備が中世期の装備をした男達が……兄者、俺の目狂ってるのかな？」

劍の目には美男美女の耳が長いエルフが、皮装備の男達に倉庫に連れて行かれている光景が目に見えていた

龍「安心しろ正常だ…こちらでもエルフの少女を保護した…しかもつけ耳ではないしっかりとした耳だ」

劍「Wow…マジか…じゃあ、どうします？監視続けます？それとも襲撃して助けます？」

交戦規定などくそくらえレベルなのかしれつと襲撃の言葉が出て来た

龍「…ひとりで行けるか？」

劍「ああ、皆殺しに出来るよ」

龍「皆殺しはやめとけ、後で色々聞く…とりあえず、俺と仁は装甲車と自走砲を持つてくるそれまで耐えろ通信終了」ブツ…

劍の強さを知っている龍は後を全部任せて通信を切る

劍「了」ガチャ！

通信機を閉じ双眼鏡をしまった劍は、89式を持ちボルトを引いて5.56mmを装填
そして…

劍「着劍つげけん…よし、殺るか」カチツ…

腰に着けていた銃劍を89式の先端に付け劍は闇夜に紛れて動いていく…

エルフの村

「おい！急いで男女分けて収容しろ！男は強制収容の場所、女は野営地の場所だ！」

「了解！おい！とつとと歩け！」 ドツ！！

「ウグツ！?!…うう…」 ジャラジャラ…

手枷と足枷を付けられたエルフが蹴られても起き上がって兵士の指示された部屋に入るのを遠くから眺めている二人の男がいた

ジク「フン…やはり騎士がいないエルフなんぞただの農兵だな…楽に制圧できるものだ…」

「そうですね…とは言え、まだ抵抗するエルフがいますがいかがいたしますか？」

ジク「村の外で処刑せよ、抵抗する者が後ろに居れば我が軍団に甚大な被害が及ぼすかもしれない…後手からの一撃は避けないと…」

「確かに、前の戦争では農民の反乱で補給船が途切れ主力が惨敗すると言う結果でしたからな…用心に越したことは無いですな」

ジク「全くだ…ん？」

白色の重装備を着た品のある兵士と鉄のプレートと黄色のストライプが入っている兜をかぶっている兵士が話し合っていると遠くから慌てて走ってくる兵士がいた

「ハッ…ハッ…ジク公爵！」

ジク「何だね？」

汗ダラダラで呼吸を荒げながらもジクに報告を入れる

「た、只今逃げたエルフを追跡していた部隊が…何者かの手によつて全滅してしましました…」

ジク「何だと？ いったいどういう事だ？ いくら傭兵とは言えやすやすやられる程弱くなからう…どんな方法でやられていた？」

「そ、それが…矢に刺された跡の様にやられてしまして…」

ジク「つまり弓兵か？」

「い、いえ…矢じりの様な物は無く…あつたのは…これです…」 カラン…

ジク「ふむ…」 カチャ…

金色の小さな筒を貰つた軸は片メガネを付けてよく見る…

ジク「…これは…青銅？ いや、金？…見た事のないものだ…どこで取つた？」

「近くの森林です…」

ジク「ふむ…」

「どうされますか？ ジク殿？」

ジク「…收容が終わり次第逐次索敵隊を編成、山狩りだハンターを探すぞ…周りの兵

士にも伝えよ」

「ハッ！」タタタツ…

ジク「手慣れの傭兵を3人も殺したんだ…きつと凄腕ハンターの可能性が高い…」

精鋭の傭兵がやられとてつもなく強いハンターだとジグが予測しながら編成の数とルートを作る…

「おい、聞いたか？」

「何が？」

村の外で見張りをしている二人の槍兵がこそこそと噂話をしていた…

「この村…満月の夜になると悪い奴らを殺す月の暗殺者が来るってよ」

「何だそれ？」

「どうやらな？俺たちみたいな略奪と奴隷をやっている奴は今日ここで月から現れる暗殺者に殺されるとの事だぜ？」

「ハッ…そんな噂幽霊が出てくる方が信頼性がありそうだな」

「おいおい、信じねえのか？」

馬鹿にしたように噂を話した兵士を馬鹿にしながらも信じないと遠回しに言う

「ハハッ…そんなんでたら（ウグッ!）、この場にいる俺達はとつくに殺されてるよ…そ

うは思は…あれ？」

笑って相手の方を見ると誰もいなくなっていた

「？ 一体どこい（サツ…）ムグツ!？」

剣「Good Night」スツ…パシユ!!パシユ!!

バタンツ…

サプレッサーと光学照準を着けているUSPを超至近距離で打ち心臓を撃たれた兵士はそのまま倒れる

剣「とりあえず、侵入経路はこれでいいな…」カチツ…

ホルスターに仕舞ってゆつくりと後ろに掛けていた89式を出して警戒しながら村の中心地に歩く…

剣「…」ザツ…ザツ…

小さく小さく歩いていと…

「おいー!」

剣「!?!」バツ!!

突然声がして慌てて木箱に隠れる

「何だ?」

「収容が終わり次第、すぐに編成し森林に進軍するとジク様からの指令が出された…急

いで収容するんだ」

「了解」

「では」バツ!!

「どうやら、伝令兵が警備している者や仕分けしている兵士に伝えて走り回っているみたいだ」

剣「…兄者の動きかバレたか？なら急がないとな…とりあえず…よお、大将!!」バツ!!

「え？（ドスツ!!）ギヤ…」バタツ…

銃剣で喉を刺された兵士は首を押さえたまま倒れる…

剣「ふう…ん？」

「ヒツ!!…こ、来ないで…殴らないで…」プルプル…

何か視線を感じたと思っただけで見てみるとそこには、殴られた跡がたくさんある女性エルフが頭を抱えて震えていた

剣「…」

「うう…怖いよお…」

剣「う…ん…まいったな…こういう時なんて言ったら…（おい！どうした!?!）あ、やべ…ちよつと失礼！」ガバツ!?

「キャツ!」ヒョイ…

女性エルフにどうやって落ち着かせるか考えていると村の外で死体が見つかり大人数の足音がこちらに向かってきている事に気付いた剣は女性エルフを持ち上げて慌てて近くの倉庫に入る

剣「よっ!」ダンツ!!

勢い良く扉を蹴って開けると…

剣「げっ…」

「…」

「誰?」

「人間?」

「いやそれにしては、大柄過ぎるような…」

剣「?でしよ?」

中には裸の女性エルフがいつぱい入っていた

剣「ま、まずい…と、取りあえず彼女だk(おい!あそこにも仲間が死んでるぞ!)げっ

…まずい…」

抱えている彼女だけここに入れてとりあえず離れようと思ったが、敵がもう後ろまで迫ってきていた

剣「ああくそっ！」ガツ!! ギイ…バタン!!

迷っている暇はないと感じた剣はやけくそで片手で扉を閉める

剣「はあ…あ、とりあえずおろすよ…はい」スツ…

「あ、ありがとう…あの、あなたは一体何者なのですか？」

剣「あ？俺か？」

兵士と違い出会っても殴らず優しく抱いて下ろしてくれる剣に彼らと同じではないと感じた彼女は剣が何者か聞く

剣「俺は…（ギイ…）!! おい！貴様何（パアン!!）…」ドサツ…

「うう…」

剣が答えようとした瞬間扉から兵士があらわれ叫んだ瞬間、剣の89式で眉間を打たれ絶命する…

その高い音の中にいたエルフたちは耳にガンガン鳴り響く…

そんな鳴り響く中、剣は聞かれたエルフにこう答える

剣「俺は…Arbi裁trator人…かな」

「おるべとれいらー？」

剣「まあ、意味はあとで教えるよ…じゃあね！」ニコツ

「あ、待って…」

バタン…

最後まで笑顔を彼女に見せながら扉を閉めて彼女を安全な場所に閉じ込める
剣「さて…さっきの銃声で、敵があつまつて（動くな!!）集まってたわ」

村の広場で20人の兵士が剣の周りを取り囲みソードを構える

剣「…そんな、武器で俺に勝てんのかな？」

「…」

剣「無視かよ!?!まあいいや…じゃあ、来い皆殺しにしてやるよ」ニコツ…
相手に挑発しながらも笑顔を見せる剣はとて不気味だった…

情報

持っている装備（三兄弟）

龍 20式小銃 アタツチメント サプレッサー・グリップバイポッド・4倍サイト（ACOG）・レーザーサイト（戦闘のみ起動）・（バッグ内）GLX-160グレネードランチャー

SFP9 アタツチメント なし

仁 バレットM82A1 アタツチメント バイポット・高倍率サイト（8倍）

グロック19 アタツチメント 光学照準・サプレッサー

剣 89式小銃（空挺仕様） アタツチメント バイポット・中距離サイト・レーザー

ザーサイト（戦闘のみ起動）・銃剣（バッグ内）06式小銃てき弾

USPタクティカル アタツチメント サプレッサー・光学照準・レーザー

ザーサイト

第二話 I a m j u s t i c e !!

村近くの森林

ガサガサツ!!!

「おーい！そっちは見つかったか!!」

「いいや！全くないな！ジグ公爵が探せと言われていた金色の筒も全く見つかんねえぞ
！」

ジグ公爵の指示で50名の兵士が森林の中で列になり傭兵を倒した兵士を探す山狩りをしていた

「チツ…探しても痕跡がどこもねえし…一体どこにハンターがいるんだ？」

「根気で探すしかないな」

「そうだな…あ？」

ふと探していた兵士が空を見上げてみると不思議なものが見えた

「？ どうしたんだ？」

「…あの赤い星は何だ？」

「は？…なんだあれ？」

隣にいた別の兵士も空を見てみると真つ赤に光っている星のようなものが高速で動いているのが見えていた。

「…どうする？報告するか？」

「いや、ただ単に星が光ってるだけだろ？報告する必要ないんじゃないか？」

「そうだな…こんなこと言っても頭おかしい奴に見られるしな」

「だな」

空の上に見える赤く光っている星を二人は見るが気にせず山狩りを続ける

偵察ドローン「…」

森林の奥地

龍「…」ジー…

スマホで空から偵察していた龍は森林と村の状況を確認して無線をつける

龍「こちら龍、通信状況確認送れ」カチツ…

仁「はいはい、こちら金森 仁1等陸曹通信良好ですう〜どうぞ〜」

龍「良好確認……はあ……作戦開始前にもう一度説明しておくぞ？」

仁「はいはい、どうぞ」

作戦開始前なのに想像以上に緩んでいる仁に不安になった龍はもう一度作戦の概要を説明する

龍「いいか？お前の今乗っている96式装輪装甲車を先頭に森林にいる敵の列を突破、

その後二手に分かれて仁は村中心に向かい敵司令官に対して攻撃、

俺は剣の回収して森林から撤退してくる敵の対処をする（ぐう……）……おい、聞いてんのか？」

仁「んあ？ああ、聞いている聞いている海水って醬油でできている話だよな？」

龍「そんな話題じゃねえし、そんな下らねえ世話さねえよ」

仁「冗談だつてのwww簡単に言えば敵地奥まで浸透して後方のにいる指示系統の破壊……だろ？」

龍「……わかっているわ……一応保護したエルフの子供はそっちにいる、もし乗り込まれそうになったら作戦困難になったらすぐに逃げるんだぞ」

仁「大丈夫だつて！俺にそんな失敗はねえよ龍兄さん」

龍「フツ……そうだったな……よし、これより浸透作戦を開始s（あつ、すまん先にお嬢

ちゃんを固定してから動かすから少し待つて）：先にやつておけ通信終了」カチッ：
中々しまらない感じで無線を切った龍は自走砲の運転席に入り込みエンジンをかけ
発進準備をする：

96式装輪装甲車内

「…」

仁「♪」カチャガチャ：

銃弾と砲弾に銃が大量に入っている後部座席で少女を椅子に固定している仁は鼻歌
を歌いながら締めっていると：

「あ、あの…」

仁「ん？どうしたのお嬢ちゃん？」

ギチギチに固定されているエルフの子が仁に話しかける

「…お兄さん達は、何で私たちを助けようとするの？」

仁「ん…いや、何、殺されそうな人がいるから助けるだけで特に理由は無いぞ？」

「…」

わけわからない連中に特に理由が無く自分たちを助ける…都合がよすぎる言葉に幼
い少女でも胡散臭く感じる

仁「…まあ、突然わけのわからん連中が現れて特に理由もないですがあなたたちを助けますとか普通胡散臭いもんな」

自分で言っている本人も信じられない事は分かっていたが、本当だと証明する為に仁は行動で示す

仁「ま、言葉よりも行動で示してやるから見とけよー？」

「…わかった」

少なくとも襲われそうになった時助けてくれた彼女は、仁の言葉を信用する事にした
仁「よーし！じゃあ出発だ！少し揺れるが我慢してくれよー」ガサゴソ…

少女から信頼をもらい仁はウキウキで操縦席に座る

カチツ…ブルルルンツ!!

仁「よし…ん？」

エンジンが点いて動かそうとハンドルを握った時ふと横を見てみると、通信機の横に手のひらサイズの小さなラジカセが置いてあった

仁「何これ？」カチャ…

見た所中にカセットテープが入っており開けてタイトルを見てみると…

仁「kickstart my heart…いいねえ!!」ガチツ!!

1989年にアメリカでリリースされたアメリカのヘビーメタルバンドの曲の名前

が刻まれており中身を知っている仁はカセットテープをラジカセに入れる

仁「気分転換には十分だ！」カチッ!!

ラジカセのスイッチを入れた瞬間豪快な音楽が装甲車内に響き渡る

仁「よーし：ロツクンロールだ!!」ダンッ!!

ギョルルルルッ!!!

「キャッ!?!」グワングワン!!

気分が乗った仁は装甲車のアクセルペダルを思いつきり踏み土煙を上げる

龍「ゲホツゴホツ：全く：後ろも気にしろつての：」ガコッ

後ろで土煙をもろに浴びた龍も仁に続いて自走砲を走らせる：

村の広場

そこには、1対20で戦っている自衛官と中世風の兵士達がいた

「でりゃあああああ!!!」タタタッ!!!

劍「フンツ!!」ズバツ!!

「うぐつ!？」

銃劍をつけている89式で相手の胴体を斬り付けまず一人倒すと…

「仲間の仇だ!!!」ギリギリツ…

横から弓矢を持つている兵が劍に狙いを定めるが…

劍「丸見えだ!!」カチャ!!

片手で89式を持ちながらももう片方の手でホルスターからUSPを素早く抜いて

狙い打つ

パシユツ…

「アツ!？」ドサツ…

近距離でも風や偏差を考えなければいけない弓とは違い拳銃ならば近距離でも偏差

を考えずに打てるが…

「グウ…」ムクツ…

劍「嘘だろ? バイタルパートに命中してんのに何で生きてんの?」

どうやらスタミナと頑丈さがある中世風の兵士たちには少し威力不足だったみたい

だ

「うがあああああ!!!」カチャ!ダツ!!!

弓矢を捨て腰にある小さなナイフで捨て身特攻をしてくるが

剣「バケモンはとつととぶつ倒れろつてー…のつ!!」ガツ…パシユツパシユツ…
「ギツ…」

突っ込んできた兵士の顔を掴みそのまま顔面に二発9mmの銃弾をぶち込んで絶命させる

戦士長「くつ…人間の皮を被った化け物め…おいお前ら!同時に奴を攻撃するぞ!!」
ダッ!

「おう!」ダッ!

剣「お?何?さつきまでは舐めプだったの?」スツ…

一対一で戦うのはまずいと感じた装備が良さそうな兵士が指示を出して剣に対して複数で叩き込んでくる

「うおおお!!」

剣「若いね…俺より年下なんじゃないかな?」ドゴオ!!

「うぐつ…」

自分より若い兵士が前に接近してきたが、全く構えてないのでそのまま右ストレートでぶん殴つてノックダウンさせると

「後ろはもらった!!」ブンツ!!

斧と槍が合体したハルバードという物を持っている兵士が剣の後ろを取って振り落とす

剣「そういうのは、黙って攻撃した方がいいと思うよ」バツ!!
「何!?!」

後ろの存在に気付いていた剣は最小限の動きで避ける

ガアン!!

剣「うおっ!?! すごい威力だな…」

避けた剣を追いかけられずそのままハルバードは下の地面にめり込み、真横で避けた剣があまりの威力にびっくりする

「くっ…このっ!!」グッ…

急いで攻撃しないとやられると思った兵士は急いでハルバードを引き抜こうとする
と…

ダンツ!!

「!?!」

剣「おいおい、そんな慌てんなよ俺はここにいるよ?」

「くそっ!!! 舐めやがって!!!」グッ!!

ハルバード抜こうとしている所に剣が足を乗せて兵士を煽っていると切れた兵士が

馬鹿力で持ち上げようとするが…

「!? (ま、全く持ち上がらない!? な、何でだ!?)」

剣より巨漢で筋肉のある兵士は全く持ち上がらないハルバードに動揺している間に剣は89式の銃口を向けて一言

剣「ま、筋肉だけじゃあうまく生きていけないって事さ…さようなら名もなき兵士さん」カチャパアン!!

「ギツ…」ドサツ…

眉間を撃たれた兵士はハルバードを放して後ろに倒れる

剣「ふう…さて、次はどういっただ?」チラツ…

装備が良さそうな兵士の周りを囲んでいる兵士に顔を向けると…

「うっ…」

「な、なんて強さだ…」

「化け物…」

たった一人で4人もの兵士が無残にやられているのを見たのか兵士たちの士気は落ちていた

「せ、戦士長…ど、どうしますか?」

完全に怯えきつている兵士が後ろにいる装備が良さそうな兵士に指示を仰ぐ

「ど、どうやって首がなくなっただんだ!？」

戦列を構えいざ突撃しようとした瞬間後ろにいた戦士長がいつの間にか首が吹っ飛び死んでいたせいで士気が上がっていた兵士たちが一気に士気が崩壊する

「に、にげろお!!」

「うわあああああ!!」

「ま、待ってくれ!!」

「殺される…あいつに殺される!!」

武器を捨て散り散りになりながら武器を捨て村の広場はいつの間にか剣一人だけになる

剣「…終わったか」カチャ…

静まり返った広場に剣は武器のセーフティ上げてそのままゆっくりと地面に座って煙草の火をつける

剣「ふう…やっぱり疲れるものだな…」プカー…

慣れない近接戦に疲れが溜まっているのかぼそぼそと独り言を呟く剣だった…

村の中心地

テント内

ジグ「…」

ファリス「…」

大きなテーブルで村周辺の地図と睨めっこしているジグとその斜め後ろに立っているファリスがテント内にいた

ジグ「…ファリス」

ファリス「ハッ…」

ジグ「山狩りをしてから数分経ったが…報告は？」

ファリス「まだ一つも…」

ジグ「そうか…」

山狩りをして数十分経つても敵ハンターの形跡が一切見つからない事にジグは顔を伏せる

ジグ「…（エルフの種族は暗殺に秀でているが…痕跡を残しやすい習性がある…それなのに、一つも出てこないということとは…敵のハンターはエルフではない？

では、我々グリニア帝国を敵視してエルフに友好的な種族のハンターか？

…エルフの上位的存在ハイエルフ？

いや…あの集団は戦争に協力すると言ったことは絶対にしないはず…では、ドラコニアン？

…いいや、彼らは全員戦士として育て上げられている…ハンターまがいな事すらできない種族だ…

まさか…グリニア帝国内に最近蔓延り始めた反戦を叫ぶブラックストーン組織か？」

例えウサギであろうとも全力で相手をする狩人の如く様々な思考を頭の中で展開している…

「ふ、ファリス侯爵!!」

ファリス「どうした、そんなに慌てて…少し落ち着きなさい」

「は、はい…ふう…」

息を荒げながらテントに慌てて入ってきた兵士はファリスの落ち着いた声で冷静になつて息を吐く

ファリス「落ち着いたか？」

「は、はい…」

ファリス「よし、じゃあ何があつた?…それと一番隊の戦士長はどうした？」

「じ、実は…」

フアリス「…これは一体」

ジグ「鉄の…塊か？一体いつからここに？」

目の前に96式装輪装甲車が現れ全員動揺していると…

ガチャン…

フアリス「!?ジグ公爵!!お下がりください!!親衛隊!!」ザッ!!

「!!おう!!」ガチャン!!!

突然96式装輪装甲車のハッチが開き兵士たちが慌ててジグ公爵を囲んで守る

突然動くハッチに謎の塊が現れたりと二つの間で緊張感が走った瞬間ハッチからギリスーツを着た男がひよここと運転席の後ろから出てくる

仁「んしょ…ふう…Hi★」ニコツ

運転席から現れた仁はジグたちに向かって笑顔で挨拶する

フアリス「き、貴様は何者だ！名乗れ!!」

仁「ん？俺か？俺は…」グイツ!

フアリスに名乗れと言われた瞬間目の前にあるM2ブローニング機関銃を正面に向けてこう名乗る

仁「俺は…正義の味方だよ」ガツチャン!!!

第三話 捕虜を解放し侵略者を皆殺しにした緑の戦士達

村の広場

剣「…」

真ん中に死体の山がある村の広場で一人の自衛官が何かを待つていた

剣「兄者遅いなあ……なんか問題が起きたんかな？」ヂリヂリ…

中々来ない龍に何か問題でも起きたのか？と思ひ込んでいると…

キユラキユラキユラ…

剣「お！噂をすれば何とやら…遅かったですね兄者！」

キキツ…ガチャ…

龍「悪い…思いのほか動きがとろいもんでな…よっ…」ザツ…

自走砲のハツチから龍が出てきて降りる

剣「おんぼろですからね…：そういえば敵はどこに？」

確か作戦ではこの後追跡してくる兵士を迎え撃つのでは？」

龍「ああ…それが…仁が乗っていた89式装甲車と自走砲を見た敵がな…

勝手に逃げた」

剣「…は？」

龍「どうやら、初めて装甲車と自走砲を見て化け物のように見えてな…

敵はそのままどっか逃げた」

剣「…ええ？」

まさかの言葉に困惑してしまう剣に龍は落ち着いて次の事を剣に言う

龍「まあ、想定外の事はよくある事だ…弾を消費しないだけ運がいいと思っただけだ
いぞ」

剣「そうですね…とりあえず、当初の作戦通り合流出来てここの安全も確保できま
たし

仁兄さんの元に行きましょう！」

龍「ああ、そうだな…確か、向こうの側だったな行くぞ」ザツザツザツ…

剣「はい！」ザツザツザツ…

自走砲を置いてそのまま二人は仁の元に向かう…

村の中心地

「うあ…」

「いってえ…いってえよお…」

ファリス「じ、ジグ伯爵：お、おにg（ドタタタツ!!!）…」

ジグ「な、なんなんだこれは…」

ジグの目の前には足が消えている者や体を半分無くしている者…

自身の側近や親衛隊がミンチ肉に変わっている事…

この光景にジグは恐怖のあまり体が固まっていると…

装甲車にいる人物が叫ぶ

仁「FOOOOOOOOOOO!!! やっぱ大口径は最高だぜえ!!!

ヒヤハハハハハハハハ!!!」

ジグ「あ、悪魔…」

悪魔

この言葉が相応しいほどの姿だった

仁「ああ？悪魔だあ？NONONO：言つたる？俺は…正義の味方だつて！」スツ…

ジグ「こ、こんな正義の味方があるかツ!!! 大体なぜ貴様はエルフの味方になるんだ!!!

こいつらは我々を迫害してきたんだぞ!! なのに…なぜこいつらの味方をする!!

狂っているのか!!

M2ブローニングを向ける仁にジグ公爵は説得なのか自身の正当性を大声で叫ぶが

…

仁「いや、僕元々君たちの人間じゃないんで関係ないっす」

ジグ「…何？」

仁「大体、迫害されたからってまた戦争仕掛けるとか馬鹿の極みだよな？というよりか…

か… そんな迫害された過去を持っているのに逆の立場になったら迫害する側になるとか…

馬鹿を越して能無しの馬鹿だよねえ？」

ジグ「…」

例え過去にエルフ迫害されたとはいえ、逆の立場になったら同じことをする…

はたから見れば、人間がエルフを迫害をしているようにしか見えない…

仁の言う事にジグは黙ってしまう…

仁「ま、俺には関係ない話やけどねえ…よつと…」ヒヨイツ

ジグ「！くっ…」カチャ…

装甲車から降りてきた仁にジグはレイピアを抜いて構える

仁「お、構えはいいな…伊達に上に立っている訳じゃねえのか」

ジグ「くっ…（なんだこの男…感情が全く読めん…それに…

素手なのになぜそこまで余裕があるんだ!？」

相手は質のいい鎧とレイピアを持っているのに対して仁は…

ギリースーツの中にチェストリグとタクティカルプレートを着ているだけで武器は持っておらず…

ホルスターに入っているグロックはセーフティをかけたままで手にかけてもいなかった…

明らかにジグの方が有利に思われるが…そんなことで仁はビビらなかった

仁「おいおい…顔に焦りが見え見えだぜ? ハハ! 俺が稽古でもつけてやろうか?」
イクイ…

逆に焦っているジグを煽って攻撃を誘う

ジグ「くっ…このっ!!」 シュバツ!!

仁の挑発に乗ったジグは素早く接近して仁の首元に向かって突く
がっ…

仁「よっ」 サツ…

狙いがわかりやすかったのか、最低限の動きでレイピアの突きを避ける

ジグ「フツ!!」 バツ!!!

仁「お、下がった」

ジグ「……」チャキ……

攻撃を欲張らずそのまま素早くバックステップして下がったジグはもう一度レイピアを構える

ジグ「……（……全く分からん……殺意も気配も感じないのに……なぜあれほど威圧感があるんだ……!）」プルプル……

王者の風格でも出ているのか仁を見るだけで押しつぶされそうなほどの威圧感に冷や汗と手の震えが止まらない

仁「今度は手が震えてんねえ? どうした? 病気持ち? お薬飲む時間やろうか w w w
w」

ジグ「な……この……! 舐めるなあ!!!」シュバツ!!

舐め腐った仁の言葉に切れたジグは真っ直ぐ仁に接近する

ジグ「ハア!!!」ヒュンツ!!!

両手で持つて確実に仕留める為に心臓を狙った次の瞬間

仁「周りが見えないとやられるぞ?」

ジグ「え……（ドゴオ!!!）ウグツ!?!……」ドサツ……

仁の言葉に困惑した瞬間突然顔面に

大きな丸太を思いっきりぶん殴られた衝撃がジグに襲いそのまま5m吹っ飛ばされ

てる

ジグ「うあ…」

何が起きたかわからないまま意識が段々と失っていくと仁以外の声が聞こえた

龍「…舐め腐りすぎだ仁一等陸曹」

仁「はて？何の事かな？」

龍「とぼけるな…ただでさえ状況が分からん今、相手を舐めるような行為など…

いずれやられても知らんぞ」

仁「大丈夫大丈夫！その時は龍兄さんが守ってくれるから大丈夫でしょ！」

劍「まさかの他人頼り」

ジグ「…」バタツ…

ベストと銃をぶら下げている二人を見たジグはそのまま意識を失う

劍「？…あ、さつき兄者に殴られた人伸びてる…」

仁「あ、そいつここの司令官らしいから縛った方がいいよ」

劍「うん分かった…仁兄さん拘束バンドは？」

拘束する物を持っていない劍は仁に持っているか聞くが…

仁「俺狙撃手だから持ってない（ベシツ!!）痛った!？」

龍「必要な物はちゃんと持ってこい馬鹿者…」

持つていない仁にチョップをする

仁「いくら何でも狙撃手に拘束バンドなんて使わねえよ…あ、今か」

龍「はあ…ほんと…なんでこんな性格で優等生なんだろうな…」

仁「そりゃあ、真面目にやるときはやりますからねえ」

素晴らしいながらフラフラと装甲車に戻る仁に龍は頭を抱える

龍「はあ…」

剣「仁兄さんらしいですね」

龍「ああ、全くだ…頭痛くなるよ…とは言え、とりあえずは安全を確保できたな…」

よし、そいつを部屋に監禁して捕虜を解放するか」

剣「了解…重…い!!」グググ…

龍「…はあ」

仁もそうだが剣も中々个性的で頭が痛くなる龍だった…

装甲車の中

「…」キョロキョロ…

装甲車の中で仁を待っているエルフの子供は装甲車の中で色々と物色する

「…きれい」カラッ…

そういつて彼女が手に取ったのは12.7mmの徹甲弾だった

「…」ジー…

金色に光る葉莖と銀色で鏡のように磨かれた弾頭に目を奪われていると…

ガチャン…

「！」アワアワ…

仁が戻ってきたのかハッチの音が聞こえて慌てて弾をしまおうとアワアワしている
と…

仁「おーい、戻ったぞー…何やってんだ？」

「な、なにもない…」

仁「あそ……んん？」

何を慌てていたのかよく周りを見てみると…12.7mmが入っている弾薬箱が開
いていた

仁「ははあくん？さては、弾薬に触ってたな？」

「!?」ギクツ…

仁「ハハ！なあに、それくらいじゃあ怒らねえよ！

まあ、後ろの砲弾に触ってたらさすがに怒ってたけどな！」

「……これ？」 スツ……

そういつて後ろの砲弾に指をさす

仁「ああ、もしそのまま先頭に触ったら信管が作動して

このまま二人吹っ飛ばされるかもな！」 ニコツ……

「……ガタガタ……」

仁が言っていた砲弾……それは、自走砲に使われる203mmの砲弾であり

仁の言う通り二つあるので信管がもし作動すれば……文字通り吹き飛ばされ死ぬ

そんなことを初めて知ったエルフの少女はガタガタと震える

仁「まあ、たぶん信管は抜いているから多分大丈夫だけどね……それより、ほら！外に

出るぞー！」

「……怖い人は？」

仁「大丈夫！全員ミンチにしといたから安心しとけ！一応外には俺の仲間がいるから

安心しろ！」 スツ……

「……うん」 スツ……

本当に大丈夫なのか不安になりながらも仁の手を握って装甲車から出る

仁「よっ……おめえめっちゃ軽いな……ちゃんと食べてんの？」

「食べてない……」

仁「え？なんで？」スタツ…

「うち貧乏だから…お腹いっぱい食べれない…」

仁「あらら…そいつは聞いて悪かったな」ヒヨイツ…

会った時はまだ暗くよく見えなかったが、太陽が昇ってきた今よく見てみれば服装はボロボロで

体も服の上から見てもとても細い年相応の体には見えない

仁「…あ！そうだ！」ゴソゴソ…

「？」

何か思い出したのか腰のポーチの中を探ると…

仁「これ、やるよ」スツ…

中から取り出したのは、紙袋に包まれた何か

「なにこれ…」カサカサ…

それをもたらったエルフは解いてみると…

「…う…お星さま…」

中にはカラフルなとげとげ…そう、仁が渡した物は金平糖なのだ

仁「金平糖っていうお菓子だ、食べてみな！うめえぞ！」

「ホントかな…あーん」パクツ…

疑いながらも一つ口に入れる

「…甘くて美味しい!」

噛むと甘味が口の中に段々と広がっていく感覚に少女はほっぺがとろける

仁「口に合ったみたいだな!」

「♪」パクパク

夢中になつて食べてると…

剣「仁兄さーん!!」

「!!」ササッ…

剣の声に驚いて仁の後ろにササッと隠れる

剣「? その子は?」

仁「隠し子」(大嘘)

剣「ええ!? ついに僕も妹が!」

仁「嘘に決まつてんだろ純粹過ぎてなんか罪悪感出ちまつたじゃねえか」

純粹な剣にくだらないう嘘をついた仁は謎の罪悪感が襲う

剣「なーんだ嘘なのかあ…:…:…:こんにはお嬢さん!」ニコニコ…

「…」ジー…

屈んで同じ目線でニコニコと挨拶する剣にジーと見る少女

仁「大丈夫だ、こいつサイコパスだけど根はいい奴だぞ」

剣「余計な事言わないでくださいよ！」

仁「事実だからな、嘘は言つてない」

剣「むー…」

仁「それより、何かあったか？」

剣「あ、そうだった…兄者から指令です」

話が脱線したが本題の話を剣は仁に伝える

剣「装備の点検が終わり次第村近くの森林から大通りの警戒をしてくださいとのこと
です」

仁「監視つて事か？」

剣「ええ、兄者からの話によると先ほどの敵は偵察大体の可能性があるとのこと…」

別動隊がこの村に来るかもしれないのでその監視を頼むと…

仁「ふむ…確かに占領軍としては数が少ないしな…本隊が来るとしたら相当な数だな
…」

剣「もちろん兄者もそれを想定しています…ですので、これを…」カラン…

そういつて懐から10発の弾丸を仁に渡す

仁「338ラプア・マグナムか…」

劍「ええ、後、もう一つ…これを…」スツ…

今度はポツケから3発の大型弾薬を渡す

仁「徹甲焼夷弾…ラプアで抜けねえ奴はこれで殺せか？」

劍「ご名答」

仁「…はあ…分かった…使用ライフルは？」

劍「お好きにと」

仁「分かった…5分で配置に着くって言うておいてくれ」

劍「了…彼女は？」

仁「龍兄さんに預けてくれ、何とかしてくれる…ほら、お嬢ちゃんこいつについて行

きな

「…」

まだ後ろに隠れている彼女を劍に任せる為に優しく声をかけるが動かない

仁「大丈夫だ、安心して付いて行きな」

「分かった…」トテトテ…

仁の言う通りに従って彼女は劍の元に行く

仁「いい子だ…じゃあ、頼んだ」

劍「はい！じゃあ、兄者の元に行きましょう！」

「うん…」

そのまま剣とエルフの子は龍の元に向かう

仁「…さて…さっさと準備するか…」ガチャン…

龍の指示通りに仁は装甲車の中に入って監視の準備をすのだった…